The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	歯槽膿漏症の外科的療法後における歯肉毛細血管の形態に関する研究
Author(s)	山本, 明雄
Citation	大阪大学, 1967, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29232
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

氏名・(本籍)	山本明雄（やまもとあきお）
学位の種類	歯学博士
学位記番号	第 1184 号
学位授与の日付	昭和42年3月28日
学位授与の要件	歯学研究科歯学臨床系 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**歯槽膿漏症の外科的療法後における歯肉毛細血管の形態に関する研究**
論文審査委員	(主査) 教授 横溝 一郎 (副査) 教授 西嶋庄次郎　教授 滝本 和男

論文内容の要旨

毛細血管顕微鏡で観察した場合，臨床的には健康とみなされる歯肉の毛細血管と，歯槽膿漏症における歯肉のそれとでは，形態的には，異ったパターンを示すものであり，また，歯槽膿漏症に局所的治療を加えた後では，治療前のものにくらべて形態異常の出現頻度に差のある所見がみられることが知られている。そこで，歯槽膿漏症の治療後における歯肉の臨床的所見の推移と関係づけて，歯肉毛細管の形態所見の動向を長期にわたって捉えるならば，その形態異常の出現頻度の変動を通じて，歯槽膿漏症の治療成果を判断する資料が得られるのではないかと考えられる。しかし，このような報告は未だみられないので，次に述べるような被検材料と方法によってこの研究を行なってみた。

被検者は，歯槽膿漏症患者60名で，この患者の上顎，または，下顎の前歯部に外科的療法を行なった。毛細血管の被検部位は，施術部位のそれぞれの歯の唇側における歯肉縁の中央部で，被検歯数にして240症例のその部を，肉眼による臨床的所見と，毛細血管顕微鏡による毛細血管の形態的所見を観察した。

臨床的所見と毛細血管の形態所見の関係は，施術1カ月後，2カ月後，3カ月後，6カ月後，9カ月後，および，12カ月後に両所見を観察して，1カ年間にわたっての両所見の相互関係を検討した。

臨床的所見の12カ月間の成績をみると，この間の臨床的所見の推移によって，次の3群に大別することが出来た。すなわち，術後12カ月間を良好に経過したA群が約35%，術後2～3カ月間は良好に経過するが，その後は次第に不良化してゆくB群が約57%，および，施術にもかかわらず所見の改善があまりみられずに経過したC群が約8%あった。これらの群における毛細血管の形態の動向を，臨床的所見と関係づけて，各群の症例数に対する異常形態の出現頻度で求めてみたが，その成績は次のようであった。

A群のものは，術後2カ月で，毛細血管の拡張，配列異常，および調和度異常などはなくなり，ク

ラッビングは約29%，波状型，交叉型，分枝型，吻合型などは約10%まで減少した。その後の観察期間において，クラッビング，また波状型，交叉型，分枝型，および吻合型などはほぼ上記の頻度を維持して経過するが，拡張，配列異常，および調和度異常などの出現はみられなかった。

B群になると，術後2カ月まではA群とほぼ同様の傾向でクラッビングは約56%，拡張は約14%と減少するが，その後はA群と異なり，臨床的所見が不良化するのと概ね平行して，この両者の出現頻度は増加した。A群の場合に掲げている配列異常，または，波状型などの，その他の異常形態は2～3カ月後までは約12%と減少し，その後は多少の変動を示すが，ほぼその頻度を持続しながら経過した。C群では，クラッビングや拡張も，また，配列異常などのその他の異常形態も術後あまり減少せず，観察期間中を通して，臨床的所見の推移につれて多少の出現頻度の変動をみるが，術後12カ月間の平均値をみると，クラッビングは約97%，拡張は約98%，配列異常，または，波状型などの，その他の異常形態は約70%と，高い頻度を示した。

毛細血管の所見のなかから，拡張と臨床的所見との関係をみると，次のような結果となる。

臨床的所見が術後3カ月において良好であったものについて，この場合に，毛細血管に拡張がみられない140症例と，これがあった46症例のその後の臨床的所見との関係をみると，前者ではその後6カ月を経過すると，良好例は約72%，9カ月で約60%であるのに比し，後者になると良好例は，6カ月で約24%，9カ月では約9%となった。すなわち，拡張の有無によって，その後の臨床的所見の推移には差が出てくる。さらに，術後6カ月における拡張の出現頻度を臨床的所見と関係づけてみると，臨床的所見が良好であったものには約20%，歯肉縁に軽微の発赤を認めるものでは約94%であった。上記の成績からクラッビングは臨床的所見が良好なものにも相当の頻度でみられ，また，配列異常などのその他の異常形態は，拡張のように臨床的所見と密接には関係して変動しないことが判った。

なお，下顎前歯部に外科的療法を行なった2名の患者について，歯肉の臨床的所見が良好で，かつ，毛細血管に拡張の認められない時点で得られた，5歯における局所の組織所見によると，上皮附着部の再形成を示唆するような所見がみられた。

以上のことから，歯肉縁における毛細血管の形態は，歯槽膿漏症の外科的療法後の臨床的所見と一定の関係をもって推移することが明らかとなった。この結果より，術後における歯肉縁の毛細血管の形態所見のなかで，とくに，拡張の出現率の消長を参考にすると，つぎのことがいえるように思う。すなわち，術後において経時的に毛細血管顕微鏡で歯肉毛細血管の拡張の有無を観察し，これを，臨床的所見と関係づけて推察するならば，この所見は，歯槽膿漏症に対する治療の成果と，その予後を判断するために有用なものとなると考えられる。

論文の審査結果の要旨

歯槽膿漏症の患者60名について，その上顎，または，下顎の前歯部に外科的療法を行ない，施術1カ月，2カ月，3カ月，6カ月，9カ月，および，12カ月後に，被検歯数にして240症例を対象とし

て，歯肉の臨床的所見と毛細血管顕微鏡による歯肉の毛細血管形態の所見を観察し，術後12カ月間にわたる両所見の関係を検討している。

その結果によると，臨床的所見が良好になると，術後2カ月位で毛細血管の拡張，配列異常，および調和度異常などはなくなる。しかし，クラッビング，波状型，交叉型，分枝型，および，吻合型などはある程度の頻度で出現している。臨床的所見が12カ月間にわたり良好である症例では，上記の所見が大体においてその期間維持されている。臨床的所見が良好になっても，再び不良化する症例では，先ず歯肉の毛細血管に拡張，クラッビングの出現頻度が増加し，その後に臨床的所見が不良となってくる。この場合に，臨床的所見と特に密接に関係して出現頻度の変動する毛細血管の形態的変化は拡張であることを，臨床的所見の推移に関係した他の毛細血管の異常形態の出現率と比較して推察している。

この研究は，歯槽膿漏症の外科的療法後における歯肉の臨床的所見と，毛細血管の形態所見との関係を明らかにした点で，価値ある研究であると考える。